

に伴うこまごました作業を日本光学会会員のボランティアに頼る方法は、好ましいことではないので、今後も業者への委託は必要であろう。このような状況では、参加登録料を上げざるをえないのではないか。

ICOへの加盟や韓国光学会との協定締結など、国際的

な関係が急激に緊密になりつつある。このような情勢のもと、日本光学会主催の国際会議を定期的にもつことは、国際関係からみても必要であろう。上に示したような反省点を十分に吟味して、有効な国際会議とすることが望まれる。

ICOSN 2001 参加報告

早崎 芳夫 (徳島大学工学部)

2001年6月6日～8日の3日間にわたり、パシフィコ横浜会議センターにおいて、「センシングとナノテクノロジーのための光工学国際会議」(ICOSN 2001)が日本光学会とSPIEの共催で行われた。第1回の会議が2年前の同時期・同場所で行われ、今回で2回目の開催である。また、本会議終了後の6月10日、11日の2日間、なら100年会館において、「情報技術のための光学」と題してサテライトミーティングが開催された。残念ながら、筆者は参加できなかったため詳細を報告できないが、参加した方の話では、参加者も多く、盛況であったということである。国際会議場は、桜木町駅からランドマークタワーの横の大きなショッピングモールを抜け、半月型をした横浜グランド国際ホテルの横にあり、美しい横浜港の景色を楽しめるすばらしい会場であった。また、光ナノテクフェアと国際画像機器展が同時に開催されていたため、学会参加とは別の楽しみも味わえた。

会議に関する諸データは主催者側から報告されるので、ここでは、講演内容や会議全体に対する感想を報告する。

会議は、大津元一氏によるナノテクノロジーと近接場光を用いたナノフォトニクスとアトムフォトニクスのプレナリー講演からスタートした。大津氏のグループにおける近年の仕事と、これからの発展がわかりやすくまとめられていた。P. S. J. Russel氏によるフォトニッククリスタルに関するプレナリー講演では、フォトニッククリスタルファイバーをはじめ、興味深い話を聞くことができた。

プレナリー講演後、2つのオーラルセッションが並行して行われた。講演申し込みと参加申し込みを同時に行った

ことが功を奏したのか、発表取り消しが少なく、比較的大きな会場だったにもかかわらず、どのセッションも盛況であった。各セッションが4、5件の講演で構成される22のセッションには、干渉計測8セッション、ファイバーセンサー2セッション、通信関連のデバイスやシステム3セッション、ナノファブ리케이션2セッション、その他、近接場応用計測、干渉計測以外の生体計測や環境計測、イメージプロセッシングのセッションがあった。干渉計測は成熟している技術であるため応用対象が多岐にわたっており、中でも、応用対象が明確な企業の発表に、興味深い研究があった。学会名が示すとおり、ナノテクノロジーと光計測を結びつける新しい方向があり、近接場光やサブ波長構造を利用した光計測の研究に発展性が感じられた。なお、招待講演のないことに若干の違和感を感じたことを記しておく。

ポスターセッションは2回開催され、全部で35件の発表があった。オーラルセッションと同様キャンセルがほとんどなく、少し部屋が狭かったことが幸いしたのか、非常に活発に議論がなされ、はじめて国際会議に参加した学生も海外からの参加者の質問に一生懸命答えていた。ポスターセッションは1時間であったが、もう少し長い時間をとってもよかったのではないかと感じる。

筆者はこの学会名は非常によいと感じており、この国際会議を機に光技術とナノ技術の融合がいつそう発展することを望んでいる。最後に、有意義な議論の場を提供するために尽力されたスタッフの皆様に深く感謝する。